

淀川水系流域委員会 第31回淀川部会 結果概要

開催日時：2005年9月13日（火）16：00～19：15

場 所：京都リサーチパーク4号館 地下1階 バズホール

参加者数：委員15名、河川管理者（指定席）16名 一般傍聴者81名

※本稿は、議事の概要を簡略にまとめたものです。詳細な議事内容については、後日公開される議事録をご参照下さい。

1. 決定事項

2. 審議の概要

○大戸川ダム・天ヶ瀬ダム再開発の調査検討内容について

①大戸川ダムについて

②天ヶ瀬ダム再開発について

③その他

3. 一般傍聴者からの意見聴取

1. 決定事項

・特になし

2. 審議の概要

○大戸川ダム・天ヶ瀬ダム再開発の調査検討内容について

委員より、大戸川ダム・天ヶ瀬ダム再開発の調査検討内容について質問がなされた後、審議資料1-2「大戸川ダムの調査検討（とりまとめ）」、審議資料1-3「天ヶ瀬ダム再開発の調査検討（とりまとめ）」、審議資料1-4「塔の島地区の河道整備について 宇治川下流の治水対策について」、審議資料1-5「天ヶ瀬ダム再開発について」を参考に、委員と河川管理者の意見交換がなされた。主な意見交換は以下の通り。

①大戸川ダムについて

・3つの質問を述べたい。①大戸川ダムの「当面実施せず」という方針はやむを得ないと思うが、大戸川の治水は滋賀県と調整していく必要がある。どのような調整を行っていくのか。②「大戸川ダムは当面実施せず」という方針は、「天ヶ瀬ダムの放流量増大実施」とセットなのか。③5ダムの方針では、保津峡や岩倉峡が開削できない現状では大戸川ダムの効果は低いとされているが、開削が可能になる時期が来れば、大戸川ダム計画が再浮上してくる可能性があるのか。

←①大戸川の治水については滋賀県と調整していく。大戸川ダムを当面実施しない場合の大戸川の整備レベルは、将来ダムを実施することも考えられるので、二重投資にならないような規模の整備を考えなければならない。また、大戸川で1350m³/sに耐えられる整備をすれば、下流の流量増加にも繋がるので、そういった点も合わせ

て、滋賀県と調整していきたい。②審議資料 1-2 P4 のとおり、天ヶ瀬ダム再開発後を前提にしている。1500m³/s 整備を前提にした場合は大戸川ダムの効果は小さいと判断している。③審議資料 1-2 P3 のとおり、保津峡・岩倉峡の開削を実施しない場合は大戸川ダムの洪水調節効果は発現しないが、開削された場合は、淀川に対する洪水調節効果が発揮される（河川管理者）。

←万が一、天ヶ瀬ダム再開発が困難になった場合は、治水対策が難しくなるのではないか。その場合には他の代替案を考えるのか（委員）。

←天ヶ瀬ダム再開発が実施できない場合は、審議資料 1-2 P5 図 7、図 8 の通り、宇治地点で 1000m³/s を上回るため、何らかの対策が必要になってくる。現在は、天ヶ瀬ダム再開発が前提となっているため、代替案は考えていない（河川管理者）。

- ・下流への流量増を伴わない河川改修とは具体的にどんな整備なのか。上流で氾濫させるのか。大戸川は滋賀県が主体になって整備を進めていくことになるが、河川整備が遅れば、水害が発生する危険性が高い（部会長）。

←大戸川の整備をした上で、将来的に大戸川ダムができれば、二重投資になってしまい、目標としていた以上の整備をしてしまうことになる。また、大規模な改修をすれば、下流の流量増化につながってしまう。どの程度まで改修を進めていくか、調整していかないといけないと考えている（河川管理者）。

- ・「緊急性」について質問したい。高時川は治水上の緊急性から丹生ダムを実施するとしているが、治水上の条件は、大戸川も高時川と同じではないか。地元の事情や被害状況の違い等、他の判断要素があるのか。また、審議資料 1-2 P4 で示されている「11000m³/s」は現況の淀川の流下能力なのか。

←丹生ダムは、高時川・姉川の洪水対策と異常渇水対策容量の確保を目的としている。

国として大戸川ダムを実施するかどうかの判断は、瀬田川・宇治川、三川合流を対象に判断を行った。今後の大戸川の治水は課題として残されているので、滋賀県と調整していく（河川管理者）。

←バックデータがないので後ほど確認したいが、おおむね、三川合流から下流域は 10000m³/s を超える流下能力を持っている。しかし、堤防補強が必要な箇所があるため、11000m³/s を流しても安全ということではない（河川管理者）。

- ・審議資料 1-2 P6 で「大戸川下流の治水については、コスト面から、ダムよりも河道改修等が有利」という判断がなされている。この判断は、ダム以外の対策で治水安全度が確保できるという前提でなされたと理解してよいのか。具体的にどのような河道改修を想定したうえで判断したのか、教えて頂きたい。

←大戸川ダム実施後と同じ治水安全度で検討した。河道掘削と河道拡幅等のコスト比較の結果、ダムよりも河道改修の方が有利という結果が出ている（河川管理者）。

←大戸川ダムができれば 1/100 程度の治水安全度が達成できるだろうが、河道改修等でダムと同程度の安全度を保つことができるのか（委員）。

←河道延長が約 10km 程度のため、大戸川ダムよりも河道改修等の方がコストは低い(河川管理者)。

←河川管理者の中間とりまとめへの意見書の中で、堤防補強・河道改修・2線堤等で既往最大洪水に対応できるのではないかという意見を述べた。今回の調査検討結果ではコスト比較しか書かれていないので、大戸川の治水安全度確保の方法が気になる。大戸川ダムに代わる治水対策を示して頂きたい(委員)。

- ・審議資料 1-2 P8 の大戸川の氾濫解析では、実績の被害も示しておいてほしい(部会長)。
- ・瀬田川洗堰の全閉ルールが改訂された場合、大戸川ダム洪水調節効果が再度浮上してくるのではないか。また、日吉ダムと利水容量を振り替えても桂川の治水には効果がないという判断がなされているが、桂川については京都府との調整をぜひ進めてほしい。

←洗堰については見直しも含めて全閉ルールのあり方を検討していく。全閉ルール見直しと大戸川ダムが直接リンクしてくるかどうかは現時点では分からない。桂川の治水については京都府と調整していく(河川管理者)。

- ・大戸川ダムによる環境への影響調査は、ダムを当面実施しないため、行わないという方針だが、将来、ダムを建設する場合には環境が非常に重要になってくる。これまでの調査結果を速やかに公開してほしい。

←環境に関する調査結果は公表に向けて準備している(河川管理者)。

- ・移転された方々や関連事業に期待している方々との調整を誠意を持って進めて頂きたい。また、ダム建設のために仮置きされている土砂の処置をどうしていくのか。

←関係する皆様とは誠意を持って調整していきたい。仮置きしている原石に関しては、新たにダム事業を実施する場合に新規に山から切り出すのは環境に悪影響をもたらすため、適切に管理・保管をしていきたい(河川管理者)。

- ・地域社会をどう修復していくのか。「当面実施せず」という方針は、すでに地域住民の皆様にも説明したのか(部会長)。

←地元の対策協議会等への説明は随時行っている。大変厳しいご意見を頂いている。

移転者の方の苦渋の決断、関連事業・地元活性化、今後の大戸川の治水についてご意見を頂いている(河川管理者)。

- ・保津峡を開削しないことを前提に日吉ダムの貯水量を検討していると思うが、日吉ダムだけでは保津峡上流の治水は万全ではないということか。

←亀岡の治水対策は十分ではないため、対策が必要だ。京都府と調整していく。亀岡の治水対策の必要性はある。将来的には保津峡を開削したいが、下流の状況を考えれば、現在は開削できない。この代替案として考えた対策の1つが日吉ダムと大戸川ダムによる利水容量振替だった(河川管理者)。

②天ヶ瀬ダム再開発について

- ・質問したい。①天ヶ瀬ダム放流能力を 1500m³/s に増大することだが、1500m³/s とい

う数字が妥当かどうか。再度、説明して頂きたい。②増大方法についても、再度、ご説明頂きたい。③洗堰の放流能力をどう確保するか。洗堰の下流水位を下げるためには、鹿跳溪谷の整備が必要だが、鹿跳溪谷はバイパストンネル案で本当によいのか。塔の島地区の景観はどうなるのか。1500m³/s 流して宇治川下流は本当に安全なのか。④淀川が危険だから洗堰を全閉しているが、その危険性はどの程度起こりえるものなのか。

←琵琶湖の水位をできるだけ早く下げるためには 1500m³/s は過大ではない。塔の島地区については、掘削量と事業費を比較検討した結果、1500m³/s 程度までは必要最低限の掘削で流下能力を増強させることができるが、1500m³/s 以上にするためには広範囲の掘削が必要になり、事業費がかなり増える。こういった点から上流と下流で合意した 1500m³/s は妥当だと考えている（第2回ダムWG 資料 4-2 P48. 49）（河川管理者）。

←なぜ 1500m³/s なのか。琵琶湖の環境をよりよくしたい場合の放流能力も出せると思う。例えば 2000m³/s であれば、自由度は上がるが、下流がもたない。そういった検討をしているのか。工事実施基本計画の 1500m³/s を採用しただけではないかという思いもある。増大方法については、検討委員会の結果を待ちたい（部会長）。

- 1500m³/s 掘削と 1800m³/s 掘削では、30 億円程度の差しかないのか（第2回ダムWG 資料 4-2 P48. 49）。

←宇治橋上流の事業費の比較を行っている。1500m³/s 以上流そうとすれば下流域の整備も必要になる。これを含めると事業費は大きくなる。操作規則をめぐる上下流の利害対立の結果、1500m³/s で調整がついた。この数値が現在でも妥当という判断だ（河川管理者）。

- 天ヶ瀬ダムの放流能力増大は、おそらく、これが最後の機会だろう。今から考えれば、ダム建設時にもっと放流能力を持たせておかなかったのかと思う。それを考えると、3000m³/s 程度までアップしておいて、1500m³/s 運用というルールにしておけばよいではないか（部会長）。

←洗堰の全閉ルール検討によっては、新たに上下流の調整をとっていくこともあり得るが、現在のところ、1500m³/s が最適だと考えている。3000m³/s 増強を実際に施工できるかどうかは即答できない。（河川管理者）。

- 瀬田川から 1200m³/s、大戸川から 300m³/s、合計で 1500m³/s という計画だったが、大戸川ダムを建設しなければ、大戸川の流量制御はできない。また、異常渇水対策として、瀬田川のさらなる改修（800m³/s→1000m³/s）も計画されているが、これらと 1500m³/s 放流能力の関連について教えて頂きたい。

←鹿跳溪谷を整備した後では、大戸川ダムがあってもなくても、下流域の水位は変わらない。天ヶ瀬ダム以下で 1500m³/s になるように瀬田川洗堰で流量を調節することになる（河川管理者）。

- 洗堰の全閉操作を実施したのは、最近では、いつなのか（部会長）。

←昭和 47 年、昭和 40 年、昭和 36 年、昭和 28 年、大正 6 年に全閉操作が行われた（河川管理者）。

←昭和 36 年 10 月の時のことを覚えている。第 2 室戸台風の後に HWL を超えた出水があった。枚方地点で向こう側の堤防が見えないほどだった（委員）。

- ・住民と委員との意見交換会で、「後期放流が何週間も続く」という意見が出ていたが、実際に後期放流はどれくらい続くのか。また、塔の島地区で 1500m³/s 流れるのは、どれくらいの期間なのか。

←昭和 28 年 9 月洪水や昭和 36 年 6 月洪水で検討した結果では、水位が高くなった場合は全開放流は 10 日以上続く（審議資料 1-3 P6）。琵琶湖水位低下にともなって塔の島地区を流れる流量も減ずるため、1500m³/s 流れている期間はそれほど長くない。ただ、BSL±0 cm 程度であっても下流では普段は流れていない 800m³/s 程度が長期にわたって続く。このため、600~700m³/s が 2~4 週間流れた場合も含めて下流の堤防を調査し、補強が必要な区間を示した（河川管理者）。

- ・現在の塔の島地区の景観は、すでに相当変化した景観だ。以前の景観に戻していくための検討や取り組みはなされているのか。

←地域の方々に入ってもらい検討委員会で具体的な案を検討しようと思っている。新たな景観の創出を含めて検討していく（河川管理者）。

- ・1500m³/s 放流は様々な問題を解決する前提条件になっている。物理的に水を流すことは可能だろうが、亀石の問題等、難しい判断が多い。1500m³/s 放流が前に進まなければ、他の問題に波及してしまう。現状では、景観がネックになっている。「背に腹は代えられない」という決断がなければ、うまくいかなるのではないかと心配している。

- ・1500m³/s 放流は何十年かに 1 回程度で瞬間的な流量で、平常時には 800~1000m³/s が最大流量とのことだが、こういった見地から、環境への影響や河床変動への影響は検討しているのか。

←環境への影響については、現在、検討を進めているので、まとまり次第報告する（河川管理者）。

←流速の増加が河床変動に与える影響は、現時点では検討できていない。流域全体を見た土砂移動の適正化も含めて考えていく必要があると思っている（河川管理者）。

- ・審議資料 1-3 P20 では、天ヶ瀬ダム貯水池の水位変動幅が 1.5m 増加するとあるが、陸上昆虫と水中昆虫を分けて、流速や音の変化等に対する影響も調べて頂きたい。これからダムを造る場所ではしっかりと環境の調査検討をしているが、天ヶ瀬ダム再開発では弱い気がする。流速や水位に対する調査をして頂きたい。

←発電最低水位の引き下げによって、変動幅が 1.5m 大きくなるだけで、常に 67.1m 水位になるわけではない。現在でも予備放流時には 58m まで水位を下げるため、従来運用の変動幅の中での変動である。陸上昆虫と水生昆虫への影響については学識者の方々と相談をして調査検討を進めていきたい（河川管理者）。

- ・塔の島地区のナカセコカワニナは、800m³/s 放流時に流されているのか。1500m³/s 放流で存続できるかどうか、検討が必要だ。また、生息域の流速等のデータはあるのか。
 - ←流速そのもののデータはないが、河道断面は分かっているので、流速はすぐに出せる。ナカセコカワニナへの影響も検討事項だと考えており、紀平委員（前委員）にお話を伺っている。800m³/s 放流によってナカセコカワニナがいなくなったという話は聞いていない。100%流されていないかどうかわからないが、洪水後でも残っていることは事実だ（河川管理者）。
- ・天ヶ瀬ダム再開発の環境への影響調査・検討は、全般的に「これから」ということだが、川上ダムのオオサンショウウオへの対策等に比べて遅れている気がする。
 - ←環境に関する検討は鋭意進めていきたい。放流方法や放流口、構造などが決まらなると模型実験ができないため、遅れている面もある。現在、志津川の方々から低周波音の被害があるという話を聞いているが、河川管理者としては把握できていない。今後どれだけ増えるのかも把握し、それが重大な影響なのかどうかまで含めて、環境委員会等の意見を聴きながら検討していきたい（河川管理者）。
- ・1500m³/s 整備後の宇治川下流や淀川への環境への影響に関する調査検討はどうなっているのか。
 - ←まずは下流域でどのような流況変化が起こるのか、再現しようと考えている。その後、淀川環境委員会等で意見をお伺いしたい（河川管理者）。
- ・低周波に関する検討状況が、審議資料 1-3 P15 で示されているが、新たな放流口設置によって低周波音の拡大するのか。
 - ←現況における低周波音の調査を実施した。堤体に新たな放流口を開けた場合に関しては、模型を作成して実験する予定だ。低周波音には環境基準がなく、どの程度増えたらどう影響するのかといったところまで検討しないといけないと考えている。基本的には空気振動が遠方に伝わるため、発生源対策や影響が発生している箇所での振動対策を考えている。現施設においても、近辺の寺院で防止対策として補償がなされたと聞いている（河川管理者）。
- ・低周波のサンプリングはいつ実施しているのか。他ダムの事例は調査しているのか。
 - ←全開放流時にサンプリングしている。低周波は、ダムの規模と相関があるわけではなく、ゲートの構造や放流量のタイミングで発生しているようだ（河川管理者）。

③その他

- ・参考資料 1 の本多委員の意見には事実誤認があるのではないかと。「委員会が対象洪水を第 2 位にせよ」とは言っていない。委員会は「実績の既往最大洪水にすべき」という意見を述べてきた。
 - ←委員会ではなく、委員個人から出た意見であることは確かだ（委員）。
 - ←資料として提出する時は、委員個人の意見と委員会の意見は区別すべきだ（委員）。

3. 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者3名からの発言があった。主な意見は以下の通り。

- 1500m³/s 放流に関する調査検討が不十分だ。昭和46年の計画決定では、宇治川流域の計画高水量1500m³/sで大戸川ダムと天ヶ瀬ダムで洪水調節をすることになっていたが、大戸川ダムを実施しない場合には、この計画との関係はどうなるのか。塔の島地区の代替案である引き提案や嵩上げ案について数年前の検討会で検討した結果、河道掘削を検討するということになったのではないか。今後検討するのであれば、いつ検討するのか。委員会は、判断する上で必要なデータをもっと要求すべきだ。ナカセコカワニナと流速や低周波の検討結果等についてデータを要求して頂きたい。ゲート増設後の低周波増大にはおそらく対応できないと思う。塔の島地区の検討委員会は、住民合意を得ていく上でも、委員を公募すべきだ。
- 猪名川部会で「開削を検討すべき」と言ったのは治水を専門とする委員ではなく、一部の委員だ。また、狭窄部上流の治水対策として開削を挙げたのは河川管理者側でない。河川管理者は部会の要望を受けて、開削を提案したわけではない。また、猪名川部会は「既往第2位にすべき」とは言っていない。河川管理者の案をおおむね容認しただけだ。
- 亀岡の治水対策と大戸川ダムや天ヶ瀬ダム再開発との関連がよくわからない。河川管理者は桂川も含めて大戸川ダムと天ヶ瀬ダム再開発を検討して頂きたい。

以上